様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１５Ｋ１６６６４

研究課題名（和文）1950年代日本におけるアマチュア写真文化と写真産業

研究課題名（英文）Amateur Photography Culture and Photography Industries in 1950s Japan

研究代表者
甲斐　義明（Kai, Yoshiaki）

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：２０７０９８８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では1950年代の日本におけるアマチュア写真実践の状況を調査し、その文化的意義について考察した。カメラ雑誌やカメラ・メーカー主催の写真コンテスト、アマチュア写真に影響を与えた木村伊兵衛の作品、土門拳らによる「リアリズム写真」をめぐる言説を分析したほか、同時代の生活記録運動との関連性を明らかにした。研究成果は学術論文にまとめたほか、刊行予定の単著の一部として公表予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では英語圏の（芸術写真史からは抜け落ちてきた、それぞれの地域や時代に固有な写真実践のことを指す）「ヴァナキュラー写真（vernacular photography）」研究の視点を取り入れ、日本の写真文化に対する新たな見方を提起した。本研究では1950年代の日本のアマチュア写真文化を考察するにあたっての理論的な参照項のひとつとして、英語圏の写真論・写真批評における「アマチュア写真」の位置づけについても分析したが、得られた知見については、編訳書『写真の理論』（月曜社、二〇一七年）の訳者解説に記した。

研究成果の概要（英文）：This study examined amateur photographic practice in Japan in the 1950s to consider its cultural significance. The topics explored included amateur photography contests hosted by photography magazines and photographic equipment makers, work by Ihei Kimura that influenced amateur photographers, and the discourse of so-called “riarizumu shashin” (realist photography) promoted by Ken Domon and others. The study also demonstrated the affinity between amateur photography in the 1950s and the contemporary “seikatsu kiroku undo” (movement of documenting lives of ordinary people).

研究分野：美術史

キーワード：写真史　アマチュア写真　1950年代

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

申請者は 2008 年以降、日本写真史における「スナップ」の歴史についての研究を行い、博士論文のほか数編の学術論文として発表してきた。本研究課題は「スナップ」の研究によって得られた成果に基づき、同研究の視座をさらに広げて、日本のアマチュア写真文化と写真産業の関係性を明らかにしようとするものである。スナップやスナップ写真という言葉は一般的には気軽に撮影した記念写真のことを指すが、日本の写真界では異なった意味で用いられ、英語で言う candid photo、すなわち「被写体に気づかれずに素早く撮影した写真」のことを指してきた。申請者のこれまでの「スナップ」研究は次の三点を明らかにした。第一に、アメリカと比較した際の日本写真史の独自性は、「スナップ」が 1930 年代半ば以降、常に中心的な写真ジャンルであった点に見出せること。第二に、「スナップ」がジャンルとして人気を保った理由のひとつは、それがプロだけでなくアマチュアによっても容易に実践可能だったからであること。第三に、土門拳らプロ写真家による 1950 年代のアマチュア向け解説書の多くが、単なる技術解説ではなく、カメラを通して社会の出来事に批判的な目を向けるための啓蒙書として意図されていたこと。

申請者の「スナップ」研究は、写真史研究の新たな動向である「ヴァナキュラー写真研究」の問題点も明らかにした。Beaumont Newhall らによる伝統的な写真史が、著名な写真家による「作品」としての写真を特権的に扱っているという点で実質的に「芸術写真史」であったの対し、「ヴァナキュラー写真研究」は、そのような枠組みからは抜け落ちてきた無名の商業カメラマンによる広告写真や、アマチュアの記念写真を主な考察の対象としてきた。申請者はニューヨーク市立大学で「ヴァナキュラー写真」研究で知られる Geoffrey Batchen の指導を受けることで、この研究動向に深く接する機会を持った。「ヴァナキュラー写真」研究は既存の写真史研究を刷新したが、問題点がないわけではない。そのひとつは、アマチュア写真の「非芸術性」や「順応主義」を過度に強調することで、アマチュア写真を記念写真や家族写真と同一視してしまっている点にある。しかし実際にはアマチュア写真は多様な実践であり、熱心なアマチュア写真家は単なる記録や記念としてではなく、表現行為として写真を撮影している。この実践の社会的意義については十分な検討が行われていない。

申請者の「スナップ」写真研究は、このジャンルの成立に対するアマチュア写真家の関与を明らかにしたが、今後検討すべき新たな課題も浮かびあがらせた。第一に、これまでの申請者の研究は主にプロ写真家による作品を分析の対象としていたが、その影響を受けて制作されたアマチュア写真家自身による作品についても考察する必要があることがわかった。第二に、「スナップ」というジャンルの成立と流行にあたって、海外からの影響やプロ写真家の活動だけではなく、カメラ・メーカーや出版社などの写真産業が果たした役割についても考慮しなければならないことが判明した。第三に、趣味としてのアマチュア写真の中には「スナップ」のジャンルに含まれないものも多く存在するため、アマチュア写真を表現行為として包括的に理解するためには、「スナップ」以外の写真ジャンルにも注目する必要があることがわかった。

２．研究の目的

本研究では①「日本のアマチュア写真文化が日常生活の記録にとどまらない表現を志向

した背景には、日本の写真産業がカメラ・メーカーを中心に構成されてきたことの強い影響がある」、②「（それにもかかわらず）1950 年代のアマチュア写真文化には写真産業の思惑を超えた、社会批評としての側面があった」という二つの仮説を立て、この仮説を立証するために、50 年代日本写真史の三つの主要な動向（「リアリズム写真運動」、「主観主義写真」、「アマチュア写真コンテスト」）に対する写真産業の関与を検討する。欧米と比較した際の 50 年代日本のアマチュア写真文化の特異性を明らかにすることで、近年の国際的な写真史研究が強調してきたアマチュア写真の「非芸術性」や「順応主義」が、日本の状況にどの程度当てはまるのを解明する。

３．研究の方法

本研究では年度ごとにそれぞれ「リアリズム写真運動」、「主観主義写真」、「写真産業主催のアマチュア写真コンテスト」などの主要トピックについて二次資料の検討を行った後、日本および海外の美術館、図書館、アーカイブ等で一次資料の調査を行った。これと並行して、文献調査によって得られた成果に理論的枠組みを与えるために、「アマチュア」概念の考察、およびアマチュア写真の芸術的・文化的意義について理論的考察を行った。アマチュアの表現行為について美学的な視点から検討した研究を幅広く参照し、アマチュア写真理論への応用可能性を探った。

４．研究成果

１）「アマチュア写真」概念の理論的考察

1950 年代の日本のアマチュア写真についての考察は、「アマチュア写真とは何か？」という問いと切り離して行うことはできない。しかしながらアマチュア写真の定義は必ずしも自明ではなく、文化や時代によってその意味は変化する。そこで平成 28 年度は主にアマチュア写真の概念についての理論的考察を中心に研究を進めた。20 世紀後半の日本および欧米の主要な写真史研究・写真批評において、アマチュア写真がどのように論じられ、どのような評価が与えられてきたかについて検討を加えた。写真史研究でアマチュア写真に対する注目が高まったのは比較的最近のことであるが、写真批評においては以前から、写真の大衆性は常に主要な問題のひとつであった。しかしこのことについては、これまであまり重視されていなかったように思われる。得られた知見については編訳書『写真の理論』（月曜社、2017 年）の訳者解説において示した。ジョン・シャーカフスキー、アラン・セクーラ、ロザリンド・クラウス、ジェフ・ウォール、ジェフリー・バッチェンら、英語圏の主要な写真論の書き手はみな、写真が本質的に大衆的なミディアムであることを理解し、芸術写真を評価するのであれ、批判するのであれ、それをアマチュア写真との対比において捉えている。他方で、地域や時代によって異なるアマチュア写真の多様性についての具体的考察は、これらの写真論においても、十分に行われているとは言えないこともわかった。1950 年代の日本における具体的・個別的な状況の分析を通して、アマチュア写真という 19 世紀末以降のグローバルな現象を検討することの意義が再確認された

２）大衆文化論におけるアマチュア写真の位置づけ、およびリアリズム写真と生活記録運動の関連性についての考察

1950 年代の大衆文化論におけるアマチュア写真の位置づけについて分析し、韓国・ソウルで 2017 年 10 月に行われた The Korean Society of Art History 主催のシンポジウムで口頭発表を行い、その後、同学会誌『美術史學報（Korean Bulletin of Art History)』に論文「「健康な文化現象」か、それとも「罪深いお道楽」か？―― 1950 年代日本におけるアヴァンギャルドとアマチュア写真」（日本語および韓国語訳）を発表した。同論文では、第一に当時の前衛芸術をめぐる言説における写真メディアの位置づけについて、第二に生活記録運動とリアリズム写真の関係性について考察し、1950 年代には多くの芸術家や批評家が一般大衆の芸術表現を肯定的に捉えていたこと、そして、当時のアマチュア写真ブームがそうした批評の動向と接点を有していたことを指摘した。

３）木村伊兵衛作品の再検討

土門と並んで 1950 年代の日本におけるもっとも重要な写真家のひとりである、木村伊兵衛の活動と作品について再検討を行った。具体的には、1950 年代の木村作品における身体表象を分析し、それが同時代の視覚表象とどのような関連を持ち、アマチュア写真家の作品にどのような影響を与えたのかを検証した。

1954 年の木村の作品集『木村伊兵衛傑作写真集』においては、画家、舞台俳優、ダンサー、農民など様々な職種の女性の身体が描写されている。それらの身体を、同時代の映画や絵画における身体表現と比較することで、木村の写真を戦後日本の視覚文化の中に位置づけることを目指した。それと同時に、1950 年代の日本写真史を国際的な文脈の中で捉え直すことを試みた。申請者はこれまで日米の写真史の比較を行ってきたが、1950 年代に関しては、ヨーロッパ、とりわけフランスの写真史との比較が重要であることが改めて確認されたため、フランスの同時代の写真表現が日本の写真家たちにどのように受容されたのか、その実態を明らかにすべく調査を行った。フランス国立図書館、東京都写真美術館ほかで資料調査を行い、1950 年代の日本とフランスの写真雑誌・カメラ雑誌にどのような類似点と相違が見出されるかについて分析した。木村伊兵衛に対するアンリ・カルティエ＝ブレッソンの影響については先行研究でもしばしば指摘されてきたが、当時のフランスではカルティエ＝ブレッソン以上に人気があったロベール・ドアノーと木村の関係については十分に検討されてきたとは言い難い。そこで本研究では、ドアノーの日本での受容、および、木村がドアノーをどのように評価してきたか、といった問題に焦点を合わせて資料調査を行った。得られた知見については寄稿依頼を受けた論文集に発表予定であり、論文の草稿も完成させたが、論文集自体の出版企画が中断したため、編者の新たな指示を待っている状態である。

１−３の研究成果については、日本のスナップ写真史に関する単著の一部としても公表予定である。単著は 2020 年度中の刊行を目指して、2020 年 6 月現在、担当編集者とともに作業を進めているところである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 甲斐義明	４．巻 49
２．論文標題 「健康な文化現象」か、それとも「罪深いお道楽」か？―― 1950年代日本におけるアヴァンギャルドとアマチュア写真	５．発行年 2017年
３．雑誌名 美術史學報（Korean Bulletin of Art History）	６．最初と最後の頁 144-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15819/rah.2017..49.123	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 甲斐義明
２．発表標題 「健康な文化現象」か、それとも「罪深いお道楽」か？ ――1950年代日本におけるアマチュア写真の前衛性について
３．学会等名 East Asian Avant-Garde: Its Histories and Critical Issues（The Korean Society of Art History主催）（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 ジョン・シャーカフスキー、アラン・セクーラ、ロザリンド・クラウス、ジェフ・ウォール、ジェフリー・バッチェン、甲斐 義明	４．発行年 2017年
２．出版社 月曜社	５．総ページ数 309
３．書名 写真の理論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考